

出雲国の「飫宇の海」

神々の国出雲といえども、『万葉集』の歌の中にはほとんど出てこない。西隣の石見では、壮大な石見聞歌群など、柿本人麻呂関係の歌があるというのに。出雲は、万葉とは縁のない土地なのだろうか。

いや、そうでもない。出雲地域の地図を見て、真つ先に目に入る地形が詠まれている。それは、宍道湖の東に位置する、半島に囲まれた「飫宇の海」(現在の中海)である。

飫宇の海の 河原の千鳥 汝が鳴けば
わが佐保河の 思ほゆらくに

(巻三―三七一)

この歌は、門部王(かたべ)(後に大原真人門部)が出雲守時代に、郷里に思いをさせて作った歌である。出雲国府から「飫宇の海」は、至近の距離とは言えないけれども、国府のその意宇川を辿れば「飫宇の海」に流れ着く。「飫宇の海」の河原の「河」は意宇川であるから、「飫宇の海」の河原とは、「飫宇の海」と意宇川が一体として捉えられた表現であるとわかる。



意宇川の河口付近(奥は阿太加夜神社)

そして、そこに浮かぶ鳥たちが鳴いている様子を見ると、奈良の「佐保河」が思い出されるといふ。しかし、なぜここで佐保川が出てくるのだろうか。平城京の門部王の居宅辺りに佐保川が流れていたから、それを懐かしんで詠んだと単純に言ってもよいのか。

考えてみると、佐保川を詠んだ万葉歌はたくさんある。それに平城京内を南北に貫く代表的な河川でもある。ならば、門部王の詠んだ「佐保河」も、都を代表する河川として詠まれたと考えた方が穏当ではないだろうか。

同じように、「飫宇の海」も出雲国のランドマークとして考えることはできないか。巻第四の五三六番歌に「飫

宇の海の 潮干の瀉(しほひ)の 片思(かたおも)に 思ひ
や行かむ 道の長道(ながみち)を」という門部王の恋の歌がある。そのなかで、「片思」(片思い)の「片」を導くために、わざわざ「飫宇の海」の「潮干の瀉」を序として用いているのは、偶然ではないだろう。こうしてみると、やはり出雲も万葉とは無縁でなかった。

(万葉文化館主任研究員・竹本晃)